

『源氏物語・夕霧と雲居雁の幼な恋』と

『伊勢物語・二十三段』についての考察

稲川 晴美

はじめに

中古文学演習Ⅰで私が担当したのは、『源氏物語』乙女・三頁L103三七頁L14(大島本)である。

この発表したところに対する意見をレポートする。

私は、『源氏物語・夕霧と雲居雁の幼な恋』と『伊勢物語』

(二十三段)について調べてみたいと思う。

担当箇所を発表した際に、『夕霧と雲居雁の幼な恋』には、当時滅多に見られなかった本人同士の意思による恋愛が見られ、伊勢物語・二十三段筒井筒の恋を思わせる』と述べた。

発表時はここで終わってしまったが、今回はそれぞれを細かく見ていき、どこがどのように似ているのか、どこが源氏オリジナルなのか、また、紫式部がこの『伊勢物語・二

十三段』をどのように見ていたのか、などを調べていきくとで、担当箇所が伊勢物語から受けた影響について、そして夕霧と雲居雁の幼な恋について考えたい。

【一】

『伊勢物語・二十三段』は世の人々にとっても愛された作品である。そのことは、近代作家・樋口一葉の『たけくらべ』や謡曲『井筒』、さらには六百番歌合などに詠まれている「幼恋」の歌などの存在が証明してくれよう。そして、源氏物語の夕霧と雲居雁の幼な恋も少なからず影響を受けていることは、ある程度予想がつくところである。

では、まず『伊勢物語・二十三段』を細かく見ていく。

この『伊勢物語・二十三段』は、

●この二十三段のような、筋立ての入り組んだ、長い時間の流れのなかに展開する人の心の物語を一篇のなかに描くといった発想は、もともとの『伊勢物語』には皆無だったといってもよいと思います。

(『伊勢物語の世界』P二一七)と述べられている。

『伊勢物語』のなかでも珍しいタイプの話であることがわかる。

また、教科書にも登場するほどの段であることも忘れてはならない。すなわち、この『伊勢物語二十三段』は、伊勢物語のなかでも特に優れた一篇であり、構成も他の段と比べると異質であったと言えるだろう。

ところで、この二十三段は三部構成であるということが昔から言われている。全釈と全訳注によれば、

●この段(二十三段)は内容的には、A筒井つの語、B風吹けばの話、C高安の女の話に分けられる(Cをさらに二つに分けることもできる)。異伝とみられる古今集・大和物語の内容は、古今集はBのみ、大和物語はB・Cのみである。大和物語の説話は、やや興味に引かれてくずれた形をとり、終わりに「この男は王なりけり」とある点からすると、伝承にもとづきながらも業平伝説によりかかる傾向にみえる。Aは伊勢物語だけに存在する。「筒井」とか「井筒」の話は伊勢物語以前にはみえないが、井戸を掘ることは奈良時代の記録にみえている。「筒井つ

の」の歌は他の作品になく、また内容的にある地方の特性をよんだものではないから、伝誦歌であったとは考えられない。けっきょくこの段は、B・Cの話が大和地方に伝承されていたのを核にし、それに物語作者がAを創作付加したのであろう。(全釈)

●この二十三段の話は、もともとは、いわゆる筒井筒の話「つひに本意のごとくあひにけり」で終わっていたものであろう。ところがそれに、『古今集』雑下の「題しらず読人しらず」の334の歌の左注による話を加え、さらにその後日談の形で「まれまれかの高安に来てみれば」以後の話を加えたものと見られる。この第三段目の話は『万葉集』十二332「君があたり見つつもをらむ生駒山雲なたなぶき雨はふるとも」によつたと見られる一首をはじめとして高安の女の独白の歌ばかりが二首ならんでいるだけである点、『伊勢物語』では珍しい形になっている。

(全訳注)  
このことから、伊勢物語二十三段で第一部といわれている「筒井つ」の話は、オリジナルの創作であるといわれている

し、また、話自体は古くからあり、地方に伝承されていたに違いないとも言われていたり様々である。

ともあれ、最初に述べた、影響を与えられた作品はすべて第一部をもとにした作品であることから、ほかの第二部・第三部よりも後世に与えた影響は大きいことがうかがえる。勿論、『夕霧と雲居雁の幼な恋』もそれに漏れず、第一部の影響を受けていることは明白だ。

では、ここからは、二十三段第一部に的を絞り考察していく。

#### 【本文】

①むかし、ゐなかわたらひしける人の子ども、井のもとにい

てて遊びけるを、大人になりにければ、男も女も恥ぢかはし

てありけれど、男はこの女をこそ得めと思ふ、女はこの男を

と思ひつつ、④親のあはすれども聞かでなむありける。さて、こ

のとなりの男のもとより、かくなむ。

筒井つの井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに

女、返し、

くらへこしふりわけ髪も肩過ぎぬ君ならずして誰かあぐべき

など言ひ言ひて、つひに本意のごとくあひにけり。

(『全集』)

以上が二十三段第一部といわれている箇所全文である。(野線は稲川が補足)

なお、以下に、今回考察する範囲の源氏物語「乙女」全文を載せる。

冠者の君、ひとつにて生ひ出でたまひしかど、おのおの十にあまきたまひて後は、御方異にて「睦ましき人なれど、

男子にはうちとくまじきものなり」と父内大臣聞こえたまひて、け遠くなりたるを、幼心地にも思ふことなきにしもあらねば、はかなき花紅葉につけても、離遊びの追従をも、ねんごろにまつはれ歩き、心ざしを見えきこえたまへば、いみじう思ひかはして、けざやかには今も恥ぢきこえたまはず。御後見どもも、「何かは、若き御心どちなれば、年ころ見ならひたまへる御あわひを、にわかにも、いかがわもて離れはしたなめきこえん」と見るに、女君こそ何心なくおはすれど、男は、さこそものげなきほどと見きこゆれ、おほけなくいかなる御仲らひにかありけん、よそよそになりては、これをぞ静心なく思ふべき。まだ片生ひなる手の、生ひ先うつくしきにて、書きかはしたまへる文どもの、心をさなくて、おのづから落ち散るをりあるを、御方の人々は、ほのぼの知れるもありけれど、何かは、かくこそと誰にも聞こえん、見隠しつつあるなるべし。

(『全集』)

では、各部分ごとに源氏物語『夕霧と雲居の雁の幼な恋』と比較検討していく。

① むかし、みなかわたらひしける人の子ども、井のもとにて遊ぶけるを、大人になりにければ

【訳】昔、田舎暮しの境遇にあった人の子どもたちが、井のところに出来て遊んでいたのだが、大人になってしまったので…(全集)

この「おとな」は、後の「ふりわけ髪も肩過ぎぬ」と歌に詠んでいることから考えると、必ずしも成人式男は元服、女は装束を終えた男女、といった厳禁な意味ではなく、少女がおとなしく成長した、という意味でとらえるべきだろう。そう考えたとなると、ちょうど夕霧十二歳、雲居の雁十四歳のころを、つまり二人の幼な恋の場面を思い起こさせる。

また、ここは、『夕霧と雲居の雁の幼な恋』の冒頭部分、

冠者の君、ひとつにて生ひ出でたまひしかど、おのこの十にあまりたまひて後は…(全集)

この部分に酷似している。

夕霧は雲居の雁と大宮のもとで育ったわけで、伊勢物語で

言うところの「田舎暮しの境遇にあった人の子どもたち」に対応するだろう。ここでは、田舎暮し、というのではなく、

「同じ場所で育った」と読めは良いわけでなんら問題はない。

そして「大人になってしまったので」は「おのおの十にあまりたまひて後は」に対応する。これは、言葉を変えてはいるが、言っている意味は全く変わらないと思う。

以上のことから、この①では、源氏物語は伊勢物語をほぼそのまま元になっていることがわかる。

② 男も女も恥ぢかばしてありけれと

【訳】男も女も恥ずかしいと思うようになったけれども(全集)

伊勢物語のこの箇所は、恥ずかしいと思うようになったので「なかなか会えなくなった」と解釈した。源氏物語でこの箇所に対応すると思われるのは、

御方異にて「睦ましき人なれど、男子にはうちとくまじきものなり」と父内大臣聞こえたまひて、け遠くなりたるを…(全集)

ここであると思われる。

一見、この箇所は同じことを、つまりは「なかなか会えなくなった」ことを言っているかのように思える。だが、「会えなくなった」原因を考えてみると、伊勢物語と源氏物語の違いに気付く。

【伊勢物語】…年頃の羞恥心から、お互い想っているのに会えなくなる。自然の行為と言えよう。

【源氏物語】…父内大臣の思惑(雲居の雁を東宮妃にしようとする政略的な考え)から、二人は引き離された。自然な行為によるものではなく、他人からの圧力があつてのことであるところがポイント。

ここに、伊勢物語と源氏物語の違いが見られる。

また、今回は授業での担当範囲内での比較検討ということなので、大きくは述べないが、夕霧と雲居雁が内大臣によって引き離されるという場面は、少なくとも3箇所以上は見受けられると思う。一つは、今述べた、内大臣の雲居

雁への教訓によって会えなくなる場面。二つ目は二人の仲を知った内大臣が故意に二人を会わせないようにする場面。三つ目は内大臣が大宮の邸から雲居雁を引き取る場面である。少なくとも以上のような三段階に分けての「引き離し」があるわけで、かつ、すべてが内大臣による行為であるところが、とても興味深い。二人が時間をかけて、徐々に引き離されていく場面を見る私たちは、この二人の痛いまでの感情を読み取ることができるのではなからうか。

紫式部がこの『夕霧と雲居雁の幼な恋』を伊勢物語二十三段をもとにしていることは疑いようのないところではあるが、一方で、このように、源氏物語オリジナルに変形させているところも見られるのだ。

このことに注目し、各部分の比較をまとめた後、最後に⑤として意見を述べたいと思う。

③男はこの女をこそ得めと思ふ、女はこの男をと思ひつづ

【訳】男はこの女を妻にしたいと思うし、女はこの男を夫に思っている……(全集)

に会いたいと思う気持ちがよく表れている箇所である。読み手は無理やり引き離された二人だからこそ、この夕霧の行動をかわいらしく、健気に思うのではなからうか。また、幼い光源氏が藤壺を思う場面にも同じような表現があることから、さらに幼な恋の健気さを強調する効果を成していると言える。

④親のあはすれども聞かてなむありける

【訳】親は他の男にめあわせようとしても承知しないでいた。

(全集)

ここは、私の担当範囲以降に、夕霧の乳母が雲居の雁に他の男のお付き合いはお断りなさいとの助言をしている箇所があるので、そこがここに対応しているものと思われる。そのことから考えられるのは、伊勢物語二十三段は短い篇であったが、源氏物語ではその短い篇の隅々を利用して物語内に上手く組み込んだ長編へと変えているということだ。

だが、その伊勢物語二十三段のなかで源氏物語『夕霧と雲居の雁の幼な恋』に利用された観がない箇所がある。

それは④以降の和歌の部分だ。ここを⑤とするとし、なぜ

ここは、要するに、この男と女は両想いであつたということである。両想いであるのに、お互いの羞恥心から会えないことを苦しんでいるかのように思える。

源氏では、

幼心地にも思ふことなきにしもあらねば、はかなき花紅葉につけても、雛遊びの追従をも、ねんごろにまっはれ歩いて、心ざしを見えきこえたまへば、いみじう思ひかはして、けざやかには今も恥ぢきこえたまはず。

(全集)

ここに対応していると思う。

お互いがお互いを想っているという点は伊勢物語と源氏物語に共通している。引き離された二人がお互いを想って苦しむ姿は、私たち読者に幼恋の切なさを印象深く伝えてくれる。

細かな点に着目してみよう。

そもそも、②の時点で伊勢物語と源氏物語に違いが見られたわけなのだが、そのことを踏まえて考えてみると、夕霧と雲居の雁は二人の意思とは関係なく、内大臣の思惑により引き離されたわけで、それを考えると、ここは夕霧の雲居の雁

利用されなかったのか考察していく。そして、②で述べたように伊勢物語二十三段をもとにしている一方で、源氏物語オリジナルに変形させていることについてまとめてみた。

⑤④以降の源氏物語に利用されなかった箇所について

伊勢物語二十三段の和歌はどのような役割を成しているのか考えてみる。

この二十三段の和歌は、

・筒井つの井筒にかけしまるがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに

【訳】井筒で高きをはかつて遊んだ私の背丈も、あなたを見ないうちに、きつと井筒を越すほどに大きく成長したでしょうよ。もう、大人としてあなたに逢いたいという気持ちです。

・くらべこしふりわけ髪も肩過ぎぬ君ならずして誰かあぐべき

【訳】あなたとどちらが長いかと比べあつてきました私の振分髪も、肩をすぎると伸びてしまいました。あなたのためでなくて、誰のために髪上げをしましょうか

以上のようになっている。

この歌を見ればわかるのだが、二十三段はこの和歌によって二人を結び付けている。結局、この部分で二十三段(第一部)

はハッピーエンドを迎えているのだ。この後、第二部、再三部へと続くわけだが、少なくともこの二人の「幼な恋」はここで一応の結末を迎えていると言える。

源氏物語がこの和歌の部分を利用しなかった理由は、ここにあるのではないだろうか。つまり、夕霧と雲居雁との幼な恋を阻むものはもっと深いものであるということだ。伊勢物語二十三段のように、自然に会わなくなった二人が、和歌によって結ばれるというように簡単にはいかない邪魔な存在があったからだ。それは、いうまでもなく内大臣の存在であり、言うなれば、内大臣の光源氏に対するライバル心から生まれた政治的対立が二人の間を妨げるのだ。この政治的対立があるからこそ、二十三段のようにはいかない『夕霧と雲居雁の幼な恋』があるわけで、ここに源氏物語オリジナルの工夫が見られる。

また、参考にしたいのが、阿部好臣氏の『夕霧の恋——システム破壊の視座——』での意見で、

夕霧物語の〈引用〉軸として筒井筒章段を扱いたいわけだが、〈引用〉論が、単なる重ね合わせでないのは

自明であって、要は筒井筒章段を『源氏物語』が如何に〈読み〉、その中から新たな主題軸を固有の論理によってどのように形成していったかなのである。

(『国文学』解釈と教材の研究 第32巻 13号)

ということだ。私は今回『夕霧と雲居雁の幼な恋』での伊勢物語の影響を調べてみて、この意見に大きく賛成したいと思う。

## 【二】

さて、以上のように『伊勢物語・二十三段(第一部)』を見てきたのだが、第二部・第三部は源氏物語に影響を与えているのかどうか、多少ではあるが、二十三段考察のまとめとして見ていこうと思う。

率直に言うと、伊勢物語二十三段の第二部、第三部と呼ばれている箇所の影響も源氏物語にうかがえると思う。

具体的に言うと、今後、夕霧は雲居雁との幼な恋を果たせるのだが、さらにその後、落葉宮との恋愛が発生する。

どうだろう。ここは、伊勢物語二十三段第二部、第三部を思わせる観があるように思えないだろうか。この落葉宮は伊

勢物語で言うところの高安の女である。紫式部がこの場面を伊勢物語二十三段、第二部、第三部を元にしてしているのだとしたら、非常に興味深い。とても短い篇である二十三段をここまで大きく物語に組み込んでいて、かつ、源氏物語らしい人間関係の調和を重視しているからだ。伊勢物語では高安の女は結局、男に見捨てられることになるが、その点源氏物語では全く正反対とすら言えるような、つまりは雲居の雁と落葉宮の両者を公平に愛するという結果になっているのだ。

愛の在り方について、まるで伊勢物語に挑戦するかのような節であるが、そこに源氏物語の魅力と、紫式部の非凡なる才能を感じるのはないだろうか。

源氏物語は伊勢物語を底にしていると思われる話がいくつも見受けられる。だが、以上のことを考えてみると、単に伊勢物語をそのまま踏襲しているのではなく、『源氏物語』に合わせて、様々な工夫をしているのではないかと思える。今回の伊勢物語二十三段を踏まえた源氏物語『夕霧と雲居雁の幼な恋』はまさに、そのようなことがよくわかる部分であったといえよう。

また、伊勢物語が業平の多種多様な恋愛の短編が集まった

作品であるのに対し、源氏物語は光源氏の華麗なまでの恋愛長編であり、その点を見るだけでも、紫式部が伊勢物語を踏襲しようというよりは、良い所を自分の作品に盛り込みつつ、しかし、自分の作品として伊勢物語を超えよう、と考えていたのではないかとすら思えるのだ。

## 参考文献

- ・『新編日本古典文学全集 源氏物語二』／小学館／1996
- ・『新編日本古典文学全集 伊勢物語』／小学館／1994
- ・『講談社学術文庫 伊勢物語全訳注』阿倍俊子／講談社／昭54
- ・『解釈と鑑賞』第42巻・1号
- 上坂信男「筒井筒の物語——その継承と変貌——」
- ・『国文学』解釈と教材の研究 第32巻 13号
- 阿部好臣「夕霧の恋——システム破壊の視座——」
- ・『源氏物語と伊勢物語』／島内景二／PHP研究所／1997
- ・『伊勢物語全釈』／森本茂／大学堂書店／1981
- ・『竹取・伊勢物語の世界』／田中元／吉川弘文館／1982